

## インド及びその周辺地域出土銘文の「衆生」について

井上陽（相愛大学）

西北インドをはじめとしてインド各地の遺跡から発見されている寄進銘文に「衆生 (<sattva)」の語が銘刻される時は、ほぼ「一切衆生の利益・安楽のために (<sarvasattvānāṃ hita-sukhāya)」、もしくは「一切衆生の供養のために (<sarvasattva pūjāya)」と定型句化した形であらわれ、いずれもほぼ大乘が興起したところから見る事ができる。「一切衆生の利益・安楽のために」「一切衆生の供養のために」の文言は、大乘で強調される利他行を想起させ、菩薩 (bodhisattva) という新たな理想像が出現する背景として、銘文にあらわれた利他的人間像がそのモデルだったのではないかと注目された。銘文の内容は自利のみならず、利他的行為を高く評価するような気風のあらわれであり、そのような人びとが菩薩という生き方を選んだのではないかというのである。

しかしながらこのような理解は、仏塔信仰が、上座部をはじめとして部派仏教とは別の大きな流れに属するものと考えられ、大乘仏教の「在家仏塔起源説」の文脈の中で論じられたものであることに留意しておく必要がある。「一切衆生の利益・安楽のために」「一切衆生の供養のために」という文言に関して、菩薩の利他行としての理解することをいったん括弧に入れ、その後の研究成果に鑑みつつ、銘文にみる「衆生」の概念について考察を加える。

そもそも、銘文にあらわれる「衆生」はどのような概念を持っていたのだろうか。仏教における衆生とは輪廻観と密接に結び付いている。天・地獄・餓鬼も人間理解の延長線上にあると考えられる。銘文中の「衆生」の語も多くは「仏」「阿羅漢」「声聞」「家族」「親族」などを供養（場合によっては祖先崇拜とも関係）するためという文言の後に出てくるもので、その範囲はあくまでも人間の領域にとどまる。

一方、例えば『大阿弥陀経』の第四願に、「郡萌」「蝸飛蠕動之類」までもが阿弥陀仏の名を聞いて極楽世界に往生することが説かれるように、「衆生」の概念が人間を中心とする輪廻観を基本としつつ、同時にそれとは異なる世界観を持っていたことを示唆している。このような人間のみを中心としない世界観の存在は、スワート出土金薄板銘文、ワルダック出土舍利容器銘文のように、四足の動物（畜生）、卵生の生物のような存在も「衆生」の中にも含まれていたこと銘刻するものと呼応する。

銘文中の「一切衆生の利益・安楽のために」「一切衆生の供養のために」の文言は、もともと自らの布施の功德が他者にふり向けられることを願ったものであり、祖先崇拜とも関係していた。大乘興起以後、「無上仏智」「涅槃」はゴータマ・ブッダだけでなく全ての存在に開かれることになる。「無上仏智」「涅槃」がわれわれの問題となったことで「衆生」の概念は人間のみを中心としない世界観・生命観を持ち得たのではないかと考えられる。

キーワード：人間、一切衆生、仏塔信仰